

古高ドイツ語訳 Isidor における Infinitiv の翻訳技法 (1)

平井敏雄

[キーワード：①Althochdeutsch；②Syntax；③Übersetzungstechnik；
④Isidor；⑤Infinitiv]

0. はじめに

古高ドイツ語の文法研究を、伝統的区分に従って、音韻論・形態論・統語論の各分野にわけて瞥見してみると、最も立ち後れているのは統語論である¹⁾。これは主として、オリジナルの散文作品が殆どなく、大部の散文作品のほぼ全てがラテン語からの翻訳であるという、古高ドイツ語の特殊な伝承の状況に由来している²⁾。これら翻訳作品のうちには、多かれ少なかれ、ラテン語の統語法の直接の模倣、あるいは、ラテン語独自の表現をドイツ語にうつしかえるために恣意的に案出された語法などが散見され、これらが、古高ドイツ語本来の統語法と渾然一体となって用いられている³⁾。よって、古高ドイツ語散文の統語論的特徴を記述しようとする際には、ドイツ語 Text の分析のみでは充分でなく、常に、ラテン語原文との綿密な比較によって、ラテン語の統語法からの影響を見極め、ドイツ語 Text に現れている統語論的特徴が、はたしてドイツ語として本来的・自

然なものであったかどうかを検証する態度が不可欠であると言える。また、翻訳に際して現れるラテン語の統語法からの影響の多寡は、作品ごとに異なるため、こうした比較研究は、原則としてまず個々の作品ごとに行われるべきである。全ての作品について詳細な比較研究がなされた際には、その成果に基づいて、共時的古高ドイツ語統語論の包括的記述をなす道も開けるであろう。

本稿は、こうした古高ドイツ語統語論研究の分野に何らかの寄与をなすべく計画された。個々の作品の分析からまず出発すべきであるという上述の原則に従って、筆者は本稿の研究対象に *Isidorus Hispalensis* の *»De fide catholica ex veteris et novo testamento contra Iudaeos«* の古高ドイツ語訳（成立は8世紀末。以下、*Isidor* とする）を選定した。これは、作品中に窺われる、翻訳者のラテン語ドイツ語双方についての高い言語能力の故に、多くの研究者から古高ドイツ語散文の代表的作品と見なされているものであり⁴⁾、またそれゆえ、このような比較研究の対象として大きな成果が期待できる作品である。本稿では *Infinitiv*⁵⁾ の翻訳技法を分析する⁶⁾。以下の本論では、*Isidor* のラテン語ドイツ語双方の *Text*⁷⁾ に含まれる全ての *Infinitiv* が、一覧にまとめられ、分類され、ドイツ語訳との対応関係を検討され、また、個別に分析されるであろう。ただし、紙数の都合で、今回（1）では、ラテン語の不定法の用法5種類のうち4種類までの翻訳技法を論ずるととどめ、残る1種類並びに、ラテン語の不定法の翻訳でない、ドイツ語の不定詞・動名詞の用例の分析は、稿を改めて（2）で詳述することとする。

1. 本論・Infinitiv の翻訳技法

1.1 ラテン語の不定法はどのようにドイツ語に訳されているか

Isidor のラテン語 Text 中には、不定法の用例が 58 例見られる (一覧を別表に掲げる)。本稿ではこれを便宜的に、1. 主語、2. 動詞の客語、3. 補足不定法、4. accusativus cum infinitivo、5. nominativus cum infinitivo の 5 つに分類し、以下にそれぞれの翻訳のされ方を検証する。

1.1.1 主 語

58 例中、不定法が文の主語として用いられている例は、53 行目の credere「信じる」と 187 行目の existimare「考える」という、能動態現在の 2 例のみである。それぞれ、hoc nefas est credere「これを信じるのは不敬なことである」、quod ita existimare magnę dementię est「これをそらだと考えることは、全くもって正気のさたではない」と、動詞 esse に対する主語として用いられているが、このうち 53 行目の credere の方は、ドイツ語 Text の脱落のために訳文中には対応がない。187 行目の existimare は、dhazs so zi chilaubanne mihhil uuootnissa ist と zi+動名詞⁹⁾ の語法で訳されている。ここで、ドイツ語 Text 中の不定詞・動名詞の用例を探してみると、168 行目に、同じ zi chilaubanne が、bichnaa sih dher, dhazs izs uuidharzuomi endi heidhanliih ist eomanne zi chilaubanne, dhazs...「そのような者は、次 (dhazs 以下) のようなことを信じるのが、誰にとっても馬鹿げた不信心なことであることを認めよ」という文中で、同様に主語として用いられている例がある。この部分のラテン語原文は、absurdum et profanum esse cognoscat, ut... であり、ドイツ語の (eomanne) zi chilaubanne は、原文に対応する要素のな

い完全な挿入である。よって、当時のドイツ語にも、不定詞 (zi+動名詞) を文の主語として用いる語法は存在したと判定でき、その機能は、上記 187 行目の *quod ita existimare magnę dementię est* というラテン語中で *existimare* という不定法が担っている機能と等価なものであったと考えることができる⁹⁾。

1.1.2 動詞の客語

動詞の客語¹⁰⁾として用いられている不定法のうち、次項に述べる補足不定法に該当しない用例が 5 例ある¹¹⁾ (別表参照)。うち、75 行目の *putare* 「思う」と 86 行目の *genuisse* 「生んだ」の 2 例は、ドイツ語 Text の脱落のため、訳文中には対応がない。633 行目の *errare* 「誤る」は、*quisquis... putat..., multum errare uidetur* 「…のように考えるものは誰でも、大いに過ちを犯しているように見える」という文中で用いられているが、ドイツ語訳は *so huuer so uuanit..., filu aboho firstandit* と、*uidetur* 「…と見える」を省略して、不定法 *errare* を *aboho firstandit* 「悪く理解している」と定動詞で訳し、原文のニュアンスを若干変じている。残る 2 例は、74 行目の *ut eligat sibi de duobus: aut...credere...aut putare* 「…を信じるか、…と考えるかのどちらかを選ぶことを」の文中に見られる *credere* 「信じる」と¹²⁾、104 行目の *quis confitebitur nosse, quomodo...* 「どのように…したかを知っていると主張することができる者などいようか」の *nosse* 「知っている」であり、どちらも、zi+動名詞によって訳されている (*za galaubenne* と *zi archenenne*)。ここで再び、ラテン語の不定法の翻訳でない、ドイツ語の不定詞・動名詞の用例を拾ってみると、72 行目の *ih andrem gibu za beranne* 「他の者たちに生むことをなさせるこの私が¹³⁾」の *za beranne* と、644 行目の *huuanda ni uuardh ir ęr dauides dode...chiforabodot zi aruuehhanne* 「というのも、彼はダビデ

の死より前に目覚めさせられると予言されていたのだから」の *zi aruueh-hanne* の 2 例が、目下問題になっている、動詞の客語としての用例に該当する。ここから、Isidor の翻訳者のドイツ語には、ラテン語の影響如何に拘らず、動詞の客語として不定詞 (*zi*+動名詞) を用いる語法が存在していたことが明らかになり、その機能は、上記 104 行目の *confitebitur nosse* において、ラテン語の不定法 *nosse* が果たしているものと等価であったと結論づけることができる。

ここで注目すべきは、動詞の客語としてのこれらのドイツ語の用例全てが、単純な不定詞ではなく、*zi*+動名詞の形を示していることである。71 行目の *za beranne* などの用例からして、ここでは、「不定詞がそれ自体の補足語によって *belasten* されているため」という、註 9 にあげたような説明はあてはまらない。またこのことは更に、次項に述べる補足不定詞の用例が、全て単純な不定詞を用いて構成されていることに比すとき一層際立って見える。Isidor の用例のみをもってしては、数の少なさの故に確証はおぼつかないが、古高ドイツ語においては、補足不定詞以外の、動詞の客語としては、本来 *zi*+動名詞の形が用いられた可能性がある。他の作品による検証が今後の課題となろう¹⁴⁾。

1.1.3 補足不定法

補足不定法とは、他の動詞の不定法を伴ってはじめて意味が完成される一群の動詞と共に用いられる不定法の謂である¹⁵⁾。Isidor 中では、*coepi* 「はじめた」¹⁶⁾、*delector* 「喜ぶ」¹⁷⁾、*incipio* 「はじめる」、*possum* 「できる」、*soleo* 「する習慣である」と共に用いられている 15 例の不定法がこれに該当する¹⁸⁾(別表参照)。このうち、55 行目の *non potest aequari* 「同列には置かれ得ない」の *aequari* のみは、ドイツ語 Text の脱落によって訳文中に対応が見られないが、余の 14 例は全て、ドイツ語において

も同様の、「不定詞による意味の補足が必要である語＋単純な不定詞」の語法で訳されており、しかも、ラテン語の特定の動詞に、特定の語法が整然と対応している。すなわち、上記5つの動詞＋不定法というラテン語に対し、ドイツ語では、それぞれ、*biginnan*, *lustan*, *biginnan*, *mugan*, *chiuon uesan*＋不定詞というように¹⁹⁾。このような組織的な翻訳技法を見るに、ここには、Isidorの翻訳者が用いていた、一定のSchemaのようなものの存在を仮定してよいであろう²⁰⁾。*soleo*＋不定法を単純に「動詞＋不定詞」の句で訳さず、「述語形容詞＋*uesan*＋補足不定詞」と訳し変えている点などに、このSchemaの工夫が窺われる。

不定法について見ると、補足不定法として用いられている15例は全て現在形を示している。うち11例が能動態であり²¹⁾、4例が受動態であるが、受動態のうち、55行目の*aequari*は、上述のようにドイツ語訳には欠けているので除外すると、残り3例のうち2例までが、ドイツ語では能動態に訳しなおされている。すなわち、104行目の*enarrari (si eius natiuitas a propheta non potuit enarrari*「彼の誕生が予言者によって告げ知らされ得なかったとすれば) →*arrahhon (ibu dher gotes forasago christes chiburt ni mahta arrahhon*「神の予言者がキリストの誕生を告げ知らせることができなかったとしたら) と、497行目の*reparari (ut per penitentiam reparari possit ad ueniam*「(人間が)悔悛によって救いへと再び取り戻され得ることを) →*chigarauuan (dhazs ir sih auur dhurah hreuun mahti chigarauuan zi chinisti*「彼が悔悛によって再び救いへと自らを準備することができることを²²⁾)」の2例である。ここには、Isidorの、定動詞の翻訳についても見られる、受動態を能動態で言いかえる一定の傾向を見て取ることができる²³⁾。ただし、残る1例が、現代ドイツ語の受動不定詞に相当する語法で訳されている点は注目に値する。

すなわち、105 行目の *generari*「生まれた」→*chiboran uuerdhan* であるが、これが現代語の受動不定詞と全く同じ統語論上の価値を有していたかについては疑問があり、むしろ、定動詞の場合の *uuerdhan*+過去分詞の語法と同様²⁴⁾、過去分詞は未だ *Prädikat* と意識されていたと考える方が妥当であろう。即ち、*mahti chiboran uuerdhan* は、現代ドイツ語に直訳すれば、*könnte ein Geborener werden* とほぼ同義であり、*chiboran* は、*mahti uuerdhan* という動詞句に対する *Prädikat* として機能していると考え得る²⁵⁾。

1.1.4 accusativus cum infinitivo

accusativus cum infinitivo (「対格付き不定法句」。以下、*a.c.i.* とする) の定義は種々あるが、本稿では便宜的に、「不定法の主語が対格で表現されている場合、並びに、表現されていない場合、不定法の主語が定動詞の主語と異なっている場合」を *a.c.i.* として分類する²⁶⁾。これに該当する例は、*Isidor* のラテン語 *Text* 中に 30 例ある²⁷⁾ (別表参照)。

30 例という数は、ラテン語の不定法の用例としては最大のグループをなしているわけであるが、注目に値するのは、このうちドイツ語においても不定詞(動名詞)を用いた構文で訳されているのが、わずかに 5 例に過ぎないという事実である。しかもそのうち、*a.c.i.* と見なされ得る例は 2 例に過ぎない。*a.c.i.* は、当時のドイツ語には基本的にそぐわない語法であり、原則として回避されたと考えてよい。以下に、翻訳のされ方を分類し、各々のパターンについて考察する。

a.c.i. の不定法の用例のうち、38 行目の *esse*「である」は、ドイツ語 *Text* の脱落により、訳文中には対応がない。

最も多く用いられているのが、*a.c.i.* を解体し、従属文によって訳す方法であり、19 例がこの方法で訳されている。これが、*a.c.i.* を訳す際の標

準的な方法であったと見なしてよからう。従属文の種類としては、*dhazs* („daß“) 文が 17 例を占め²⁸⁾、*huueo* („wie“) 文と、接続詞なしの接続法による従属文がそれぞれ 1 例ずつである。従属文の種類は、文脈に応じて使い分けられており、機械的でない翻訳の技能の高さを窺わせる²⁹⁾。実例を 1 つだけ挙げよう。547 : *ubi ostenditur dominum esse iesum* 「ここに、イエスが主であることが明らかにされている」は、*hear ist araught dhazs iesus ist druhtin* と訳され、548 行目の *dominum esse iesum* という a.c.i. が、*dhazs* 文で置き換えられていることがわかる。

不定詞(動名詞)を用いて訳されている 5 例のうち、2 例(400, 720) は *zi*+動名詞による訳である。400 行目の *agnoscant uocari christum filium dei...* 「キリストが神の子と呼ばれることを認めよ」は、受動態を能動の動名詞に改め、動名詞の主語と定動詞の主語を一致させることで、*bichnaan sih zi nemnanne christ gotes sunu* 「キリストを神の子と呼ぶことを認めよ」と、a.c.i. を解体し³⁰⁾、719 行目の *nec dabis sanctum tuum uidere corruptionem* 「またあなたは、あなたの聖者が破滅を見るようにもなさないでしょう³¹⁾」は、不定法句の主語を、動詞 *gheban* 「(ここでは:) …とする」に対する与格目的語におき、*ni ghibis dhinemu heileghin zi chisehanne unuuilun* とすることで、a.c.i. を回避している。すなわち、これら 2 例のドイツ語の *zi*+動名詞の用法は、1.1.2 に述べた動詞の客語としての場合に相当するものであり、ここで単純な不定詞でなく *zi*+動名詞の語形が用いられていることも、1.1.2 で得られた *Ergebnis* に合致するものである。

単純な不定詞を用いた構文で訳されている 3 例のうち、513 行目の *pati* 「受難する」は、非人称動詞 *oportet* 「…ねばならぬ」とともに用いられている。*oportet* はここでは a.c.i. を従えているが、補足不定法をもとりう

る動詞であり、ここでは *pati* が補足不定法のように意識され、補足不定法の翻訳の Schema に従って、「不定法による補足を必要とする語+単純な不定詞」の語法で訳されていると考えることができる。しかし、残る 2 例にはこの説明はあてはまらず、なかんずく、この 2 例はドイツ語においても a.c.i. と見える構文を示している³²⁾。すなわち、225 : *ir almahtic got sih chundida uesan chisendidan fona dhemu almahtigin fater* 「全能の神である彼が、自分が全能の父から遣わされたことを証した」と、601 の箇所 *huuer ist dher dhiz al ni chisehe in im selbem nu uesan arfullit* ? 「誰が、こうした全てが今や彼ら自身において成就していることを見ないだろうか」の 2 例である。

ここで注目すべきは、むしろ、513 行目の *pati* をも含めて、これらのドイツ語訳が全て、現代語の受動不定詞に相当する語法を含んでいる点であろう。これら、ドイツ語 Text に見える a.c.i. は、この受動不定詞に相当する語句が何らかの原因となって、ラテン語を直訳した異常な構文を生じせしめている例外的な場合と解釈する方がよい。225 行目の *missum... esse* 「遣わされたこと」、601 行目の *esse completa* 「成就されたこと」が、それぞれ構成要素のぴったり一致する *uesan chisendidan*, *uesan arfullit* で訳されていることが、これを裏付けているだろうし、なにより、225 行目と同じ動詞 *testor* と共に用いられている他の a.c.i. 3 例 (148, 348, 560) が全て *dhazs* 文で訳されている事実が、この解釈の正しさを証明している。Isidor の翻訳者のドイツ語は、本来 a.c.i. の語法を持っていなかったと考えられる。

591 行目の *tenere* 「保持する」は現在分詞 *uualdendan* で訳されている。a.c.i. の不定法が現在分詞で訳されているのはこの 1 例のみで、この *uualdendan* は *chuninc* 「王」に対する *Attribut* として用いられている

と考えてよいが、ここでは翻訳者はラテン語 Text を読み損ねて誤訳しており、これは確実な例とは言えない⁸³⁾。

最後に、過去分詞による翻訳例が4例ある。うち595行目の *detegi*「暴かれる」の訳である *antdhecchidero* は、付加語的に用いられている。すなわち、*nec adtendunt...mendacia detegi*「(彼らは)嘘がばれてしまっていることに気付きもしない」→*ni nemant gaumun...lugino antdhecchidero*「(直訳:)ばれてしまった嘘に(彼らは)気付かない」⁸⁴⁾。残る3例(70, 483, 513)における過去分詞は、全て動詞の客語に対する述語として機能している。これは、ドイツ語には古くから見られる本来的な語法であるが⁸⁵⁾、似たような条件下において、ある *a.c.i.* が *dhazs* 文で訳され、他の *a.c.i.* がこの過去分詞を用いた語法で訳されている区別の根拠は、*Isidor* の Text のわずかな例のみをもってしては判然としない⁸⁶⁾。

残念ながら、紙面が尽きた。1.1.5 *nominativus cum infinitivo* 及び 1.2 ラテン語の不定法の訳でない、ドイツ語の不定詞・動名詞については、稿を改めて論じることとしたい。(続く)

註

- 1) 現代の代表的な文法書である、Braune, W./Eggers, H.: *Althochdeutsche Grammatik*. Niemeyer, Tübingen 1987¹⁴⁾ に、統語論の項が1頁もないことは象徴的である。
- 2) この他、古高ドイツ語の言語資料的制約、及びそれが統語論研究に及ぼす影響については、飯嶋一泰「古高ドイツ語シンタクス研究の展望」一橋論叢 第115巻 第3号 日本評論社 1996. 689頁以下に詳しい。なお、統語論研究に際して、散文作品が韻文作品に対してもっている、資料としての優位点については、平井敏雄「古高ドイツ語訳 *Isidor* の翻訳技法(第一篇 定動詞)」(学習院大学大学院人文科学研究科 1996年度修士論文)の5頁に述べたので、そちらを参照されたい。

- 3) こうしたいわゆる「借用統語法」の諸相・定義などに関しては、Lippert, J.: Beiträge zu Technik und Syntax althochdeutscher Übersetzungen. Fink, München 1974. S. 31 ff. に詳しい。また、借用形成一般の理論的基礎付けに関しては、Betz, Werner: Deutsch und Lateinisch. Bouvier, Bonn 1965². S. 9-32 を見よ。
- 4) Isidor の Text の素性・内容・古高ドイツ語翻訳作品中に占める位置などについては、Ehrismann, G.: Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters. Erster Teil: die althochdeutsche Literatur. Beck, München 1959³. S. 263 ff., Sonderegger, St.: Althochdeutsche Sprache und Literatur. de Gruyter, Berlin/New York 1987². S. 102 ff., Matzel, K.: Althochdeutscher Isidor und Monsee-Wiener Fragmente, in „Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon“ hrsg. von Ruh, K. u.a. Band 3 S. 296-303. de Gruyter, Berlin/New York 1981² 等を見よ。
- 5) Infinitiv は、通常、ラテン語文法では「不定法」と訳し、ドイツ語文法では「不定詞」と訳す。これは、動詞的機能と名詞的機能の双方を併せもつ Infinitiv の性質に由来するものであり、どちらの名称も故なしとしない。本稿では、慣用を尊重し、ラテン語の infinitivus については「不定法」、ドイツ語の Infinitiv については「不定詞」の用語を用い、ドイツ語ラテン語双方を含めて総称する場合には、訳さずに Infinitiv とする。
- 6) 先に筆者は、Isidor を対象として、定動詞の翻訳技法を検証する研究を行った(平井: 上掲論文)。本稿はその続篇と見なされてよいものである。比較対照による翻訳技法の研究という観点から見た際の、Isidor の資料的価値の高さについては、同論文 12 頁以下に述べたので、そちらを参照されたい。
- 7) 本稿の Text には、Eggers, H.: Der althochdeutsche Isidor. Nach der Pariser Handschrift und den Monseer Fragmenten. Niemeyer, Tübingen 1964. を用いる。以下、引用の行番号などは全てこの刊本のものに従う。Hench の刊本ではなく Eggers のものを用いる根拠については、平井: 上掲論文 15 頁以下を参照。
- 8) 動名詞は、統語論上は実質的に「不定詞の属・与格形」(Isidor には具格形その他の用例はない)と見なして差し支えないのだが、形態論上は別起源のものなので、敢えて「動名詞」と別の用語を用いた。
- 9) Behaghel, O.: Deutsche Syntax. Bd. II, die Wortklassen und Wortformen. Winter, Heidelberg 1924. S. 341 f. によれば、不定詞 (zi+動名詞) が文の

主語となるこうした語法は本来のものではなく、元来、述語形容詞に対する補足語として用いられていた不定詞が、主語であった名詞が不定詞の目的語と意識されることによって、主語の機能を担うようになったものである。Dal, I.: *Kurze deutsche Syntax*. Niemeyer, Tübingen 1962² S. 110 も同様の見解を示し、*die Sache ist schwierig zu durchschauen; dies ist leicht zu verstehen* などの例を挙げている（ここから、*dies zu verstehen ist leicht* という、不定詞が主語になる構文が生じたわけである）。Dal の述べているとおり、前置詞+動名詞という句は本来他の文要素に従属する機能を持つものであり、これがはじめから、そのまま主語として機能したとは考えにくい。上記の Behaghel, Dal の解釈は正鵠を得ているだろう。Behaghel は更に続けて、*zi*+動名詞の句が完全に主語としての機能を持つに至った後にはじめて、*zi* を伴わない単純な不定詞も同様に主語として用いられ得るようになったと述べている。これに従えば、主語としての機能は、単純な不定詞よりも *zi*+動名詞の句の方が早くに担っていたということになり、Isidor の 2 例はこの古い形を示していると言える。ただし、ここでは、特に 187（ドイツ語 Text では 188）行目の *zi chilaubanne* の *zi* は、この不定詞自体がそれ自身の補足語 (*dhazs*) によって *belasten* されているために付加されたものとも考え得る。これについては、Behaghel : a.a.O. S. 307 を参照。

- 10) 主語は 1.1.1. に別扱いしてあるので、「補足語」という用語はふさわしくない。「目的語」では、633 行目の *errare uidetur* のように、定動詞が語形上受動態である場合に奇異な感を免れない。ここでは、「客語」という用語を用いた。
- 11) すなわち、不定法による補足が構文上必須ではない、あるいは、不定法の占める位置に、動詞の意味構造を変えることなく他の品詞が立ち得る構文中の不定法のことである。
- 12) *putare* の方は、ドイツ語 Text の脱落により、訳文中に対応は見られない。
- 13) この部分の *ih* は関係代名詞である。ラテン語原文 *et qui generationem ceteris tribuo, sterilis ero?* を参照。なお、人称代名詞がそのまま関係代名詞として用いられ得ることについては、高橋輝和『古期ドイツ語文法』大学書林 東京 1994. 198 頁以下を見よ。
- 14) なお、上記 104 行目の *nosse* は語形上は不定法完了であるが、*noui* は完了形をもって現在の意味をなす動詞であるので（ドイツ語の「過去現在動詞」と同じ）、*nosse* は統語論的には不定法現在として扱ってよい。よって、動詞の客語として用いられているラテン語の不定法のうち、ドイツ語に訳されているも

のは、主語の場合と同様、全て能動態現在であると言える。また、644 行目のドイツ語 *zi aruuehhanne* は、ラテン語の動名詞 *suscitandus* の訳であり、意味の上で受動的であることが興味深い。これは、現代語のいわゆる「未来受動分詞」が、動詞の客語として用いられている事例に相当するものであるが、詳しくは、ラテン語の不定法の翻訳でないドイツ語の不定詞に関して述べる稿で扱う予定である。

- 15) 松平千秋・国原吉之助『新ラテン文法』東洋出版 東京 1992. 56 頁を見よ。註 11 をも参照。
- 16) いわゆる *verbum defectivum* であり、現在形はない。
- 17) Hofmann, J.B. / Szantyr, A. : *Lateinische Syntax und Stilistik*. Beck, München 1972. S. 346 に従って, *delector* をこのグループに含める。Horatius 以降現れてきた語法であるらしい。ちなみに同書ではこのグループを, „*der Inf. bei den sog. Hilfsverba*“ と分類している。
- 18) なお, 525 行目の *loqui* 「言う」は分詞 *incipientes* 「はじめつつ」の補足語であるが, この現在分詞はいわゆる *prädikatives Appositiv* として用いられているので, ここでは定動詞と等価と見なしてよい。
- 19) このうち *lustan* のみは非人称動詞であり, 動作の主体は対格で表されている。694 : *lustida sie christenheidi chilaupnissa chihoran* 「彼らはキリスト教徒の信仰を聞いて喜んだ」。
- 20) Eggers の見解に従えば, 翻訳者はこのような翻訳に際しての Schema を, „*in einer strengen Schule*“ で習得したということになる。Vgl. Eggers, H. : *Uuard quhoman und das System der zusammengesetzten Verbformen im althochdeutschen Isidor*. in „*Althochdeutsch*“ hrsg. von Bergmann, R. u.a. Winter, Heidelberg 1987. S. 242.
- 21) *deponentia* の不定法 (525 : *loqui*) は能動に含める。Isidor の翻訳者が *deponentia* の能動的意味を正しく理解していたことについては, 平井 : 上掲論文 47 頁を参照。
- 22) ここでは, *sih chigarauuan* が, 現代ドイツ語のいわゆる再帰動詞のような機能を果たしていることにも注目されたい。
- 23) 定動詞の翻訳に際して観察できる, 受動態を忌避する一定の傾向については, 平井 : 上掲論文 67 頁以下を参照。ただし, どのような条件でこのような言い換えが行われるかについて詳しくはまだ不明であり, 今後の研究の課題である。
- 24) 平井 : 上掲論文 63 頁を参照。 *uuerdhan* の現在形+過去分詞の語法が, 未来

あるいは未実現の事態の表現にしか用いられていない事実が、*uuerdhan* がまだ本動詞としての価値を有していたことを裏付けている。

- 25) ただし、*Prädikat* として用いられている過去分詞は受動的な意味を有しているのであり、その意味でこれが「受動的表現」であることに違いはない。上記の、受動を能動態によって訳しなおしている事例とは一線を画する。なお、*Eichinger* などは、この場合の過去分詞は単純な *Prädikat* ではなく、*uuerdhan/uuesan*+過去分詞の語法には、受動態としての機能化 (*Funktionalisierung*) の、少なくとも萌芽は明らかに観察できるとしている。Vgl. *Eichinger, L.M. : Zur syntaktischen Beschreibung früherer Sprachstufen. Eine Fallstudie zum althochdeutschen Isidor. in „Althochdeutsch“ hrsg. von Bergmann, R. u.a. Winter, Heidelberg 1987. S. 416 ff.*
- 26) 対格が定動詞の客語となり、*Infinitiv* がこの対格に対する述語として働く場合を含めて広義の a.c.i.、「対格+*Infinitiv*」全体が定動詞の客語として機能している場合を狭義の(あるいは正規の) a.c.i. とする区分があるが(高橋：上掲書 141 頁, *Paul, H./Wiehl, P./Grosse, S. : Mittelhochdeutsche Grammatik. Niemeyer, Tübingen 1989*²⁸, S. 320 等を見よ)、この区別は、同じ定動詞の場合でも文脈に依存することがあり、本稿では分類の基準としては採用しない。
- 27) うち 3 例 (257, 431, 591) は現在分詞の客語として用いられているが、この分詞はいわゆる *prädikatives Appositiv* なので、ここでは定動詞と等価と見なしして差し支えない。註 18 をも参照。
- 28) うち 5 例 (120, 468, 468, 548, 580) では a.c.i. は主語の機能を果たしており、1 例 (253) ではいわゆる非人称動詞と共に用いられているが、他の場合の例と同様に *dhazs* 文で訳されている。
- 29) 従属文で訳されている不定法には、能動態現在を除くと、能動態完了 5 例 (348, 431, 468, 468, 580)、受動態完了 3 例 (485, 589, 632)、能動態未来 1 例 (560) が含まれる。これらはドイツ語ではそれぞれ該当する定動詞によって訳されている。すなわち、能動態完了は、能動態過去・「完了」(452)・受動態過去 (468: *in exterminatione fuisse*「壊滅状態にあった」を *aruuoostit uuardh*「荒廃させられた」と意識している)で、受動態完了は、受動態過去・受動態現在 (589) で、能動態未来は、「過去未来」の語法で訳されている。定動詞の「受動態」の問題、並びに「完了」・「過去未来」などについては、平井：上掲論文 50-52, 58-59, 62 頁以下の各箇所を参照のこと。なお、ラテン語の迂言形時称において *esse* 等の省略されている形は、今回「不定法」のう

ちに含めなかった。これらについては、今後予定される分詞についての稿で個別にふれることになる。

- 30) *zi nemnanne* が能動であることについては, Eggers, H. : *Vollständiges lateinisch-althochdeutsches Wörterbuch zur althochdeutschen Isidor-Übersetzung*. Akademie-Verlag, Berlin 1960. S. 6 を, *christ* が対格であることについては, Hench, G.A. : *Der althochdeutsche Isidor. Facsimile-Ausgabe des Pariser Codex nebst kritischem Texte der Pariser und Monseer Bruchstücke*. Trübner, Strassburg 1893. S. 194 を参照。
- 31) この箇所は旧約聖書からの引用であり (詩編 16, 10), 日本聖書協会刊行の新共同訳聖書 (1989 年) のヘブライ語からの訳では, 「あなたの楽しみに生きる者に墓穴を見させず」となっている。そういう意味なのであろう。
- 32) 特に, 225 は, 対格+不定詞の句が全体で定動詞の客語になっている, いわゆる「正規の」a.c.i. であり, 注目に値する。なお, 601 の翻訳例では, 定動詞が *sehan* 「見る」であり, 現代ドイツ語でも普通に見られる語法で, a.c.i. であったとしても, さほど違和感はない。
- 33) *mentientes nescio quem regem ... regnum tenere* 「なにがしという王が王国を持っていたなどと嘘を言って」の *nescio* を定動詞と誤って, *ni uueiz ih einigan chuninc ... (oostar)riihhes uualdendan* 「王国を支配していた王など私は一人も知らない」と訳している。
- 34) これは, *adtentunt* を *nemant gaumun* と熟語的表現を用いて訳したことに起因しているのであろう。
- 35) Vgl. Behaghel : a.a.O. S. 415 ff., Dal : a.a.O. S. 119.
- 36) ただし, 513 (ドイツ語 Text では 514) 行目の過去分詞による訳 (*ir ... uuardh chiboran chisaghet*) は, 明らかにラテン語原文の混乱に由来している。これに関しては, Eggers : a.a.O. S. 29 をも参照のこと。

Die Übersetzungstechnik der Infinitive im althochdeutschen Isidor (1)

Toshio Hirai

Resümee

In der vorliegenden Abhandlung werden alle Infinitive im „Althochdeutschen Isidor“, sowohl lateinische als auch deutsche, tabellenförmig aufgeführt, eingeteilt, miteinander verglichen und einzeln analysiert, um durch das Erschließen gewisser Schemata der Übersetzung und gelegentlich durch die

Aussonderung lateinischer Einflüsse, der Forschung zur eigentlichen althochdeutschen Syntax etwas auf die Sprünge zu helfen.

Ergebnisse:

Im „Althochdeutschen Isidor“ werden

1. die lateinischen Infinitive, die als **Satzsubjekt** oder
2. als **Objekt eines Verbs** fungieren, (außer in Fällen der „prolativen Infinitive“, s.u.) durch die Fügung „zi+Gerundium“ übertragen;
3. die lateinischen sog. „**prolativen Infinitive**“ durch die gleiche Konstruktion, nämlich die Fügung „ergänzungsbedürftiger Verbalbegriffe (z.B. die sog. Hilfsverba)+bloßem Infinitiv“ übertragen. Man kann hier ein strenges Schema der Übersetzung beobachten;
4. die Fügungen „**accusativus cum infinitivo**“ (A.c.I.) im wesentlichen vermieden. Die lateinischen A.c.I. werden meistens mit den abhängigen Sätzen (dhazs-, huueo- Sätze usw.) übersetzt. Zwei scheinbare deutsche A.c.I. sind nur die Sonderfälle, die durch die Anwesenheit eines „passiven Infinitive“ verursacht worden sind. Außerdem kann der A.c.I. auch durch eine Partizipialfügung (mit dem Partizipium Präteriti) übertragen werden.

(Fortsetzung folgt)

(学習院大学人文科学研究科ドイツ文学専攻博士後期課程)

別表・ラテン語の不定法用例一覧(1)

lat.	行	支配する語	分類	構成	ahd.	支配する語	構成
credere	53	nefas est	主語	hoc nefas est credere quod ita existimare magno demerito est	抜け		
existimare	187	est	主語		zi chilaubanne	ist	dhazs so zi chilaubanne mihhil uuoontissa ist
credere	74	eligat	動詞の客語	ut eligat ... aut ... credere	za galaubenne	cheose	daz ... cheose: odo ... za galaubenne
putare	75	eligat	動詞の客語	ut eligat ... aut ... putare	抜け		
genuisse	86	testatur	動詞の客語	pater eundem ... genuisse testatur	抜け		
nosse	104	confitebitur	動詞の客語	quis confitebitur nosse, quomodo quisquis ... putat ..., multum errare uidetur	zi archennenne	sih biheizsist	huuer sih dhes biheizsist sia zi archennenne, huueo...?
errare	633	uidetur	動詞の客語		(aboho) firstandit	なし	so huuer so uuanit ..., filu aboho firstandit
regnare	638	coepit	補足不定法	ille enim ... coepit regnare conuersi etiam paruoli christi fidem delectantur audire	riihhison	bigunsta	dher chiuuisso ... bigunsta riiahhison lustida sie christinheidi chilaupnissa chihoran
audire	694	delectantur	補足不定法 (分詞十)補 足不定法	incipientes primum de nomine eius loqui	chihoran	lustida	bigunston auh erist umbi sinan namun sprehhan
loqui	525	incipientes	補足不定法		sprehhan	bigunston	
aequari	55	potest	補足不定法	non potest aequari et nomine	抜け		
enarrari	104	potuit	補足不定法	non potuit enarrari	arrahhion	mahta	ni mahta arrahhion
generari	105	potuit	補足不定法	quomodo potuit a patre filius generari	chiboran uuerdhan	mahti	huueo dher sunu mahti fona fater chiboran uuerdhan
narrare	116	potest	補足不定法	quis hominum potest narrare?	chirahhon	mac	huuer manno mac izs dhanne chirahhon?
facere	187	potuit	補足不定法	angelus cum deo potuit facere hominem?	chifrumman	mahti	mahti angli so sama so got mannan chifrumman?
celebrare	475	potuerunt	補足不定法	que ... celebrare non potuerunt	(dhar) haldan	mahtun	dhiu sie ... dhar haldan ni mahtun
reparari	497	possit	補足不定法	ut ... reparari possit ad ueniam	sih chigarauuan	mahti	dhazs ir sih ... mahti chigarauuan zi chinisti
esse	597	potest	補足不定法	neque enim mendax esse potest osee propheta	uuesan	mac	noh einich lughin ni mac uuesan osee propheta
descendere	199	solitus est	補足不定法	qui ... descendere solitus est	nidharquheman	chiuuo ist	dher ... chiuuo ist fona himile nidharquheman
ascendere	199	solitus est	補足不定法	qui ... solitus est et ascendere	uphstigan	chiuuo ist	dher ... chiuuo ist ... endi uphstigan
rapere	676	solebat	補足不定法	qui solebat ab ea rapere praedam que solebant uenena praedicare	ardhinsan	chiuuo uuas	dher chiuuo uuas fona dheru chirihhun nama ardhinsan
praedicare	693	solebant	補足不定法	aliquando	predigon	chiuuo uuarun	innan dhiu dheedun chiuuo uuarun iuhuuanne eitar predigon
esse	38	dubitamus	a.c.i.	nec ... dubitamus dominum saluatorem esse	抜け (↓従属文)		
scire	120	manifestum est	a.c.i.(主語)	scire autem manifestum est solum patrem, quomodo...	ist dhurahchunt	(zi uuizsanne ist)	(zi uuizsanne ist nu uns chiuuisso.) dhazs fater einemu ist dhurahchunt

別表・ラテン語の不定法用例一覧(2)

lat.	行	支配する語	分類	構成	ahd.	支配する語	構成
esse	148	testatur	a.c.i.	hunc christum ... pater deum et dominum ita esse testatur	ist	chundida	umbi dhesan selbun christ chundida almahtic fater ..., dhazs ir ist got ioh druhtin
esse	166	cognoscat	a.c.i.	absurdum et profanum esse cognoscat, ut...	ist	bichnaa sih	bichnaa sih dher, dhazs izs uuidharzuomi endi heidhanliih ist ...
esse	245	ostenderet	a.c.i.	ut eundem spiritum ostenderet esse deum	ist	chichundida	dhazs ir chichundida dhazs dher selbo gheist ist got
esse	253	pateat	(非人称十) a.c.i.	pateat ... patrem et filium et spiritum sanctum esse deum	sii	araugit ist	araugit ist ... dhazs fater endi sunu endi heilac gheist got sii
esse	254	putant	a.c.i.	hinc isti filium et spiritum sanctum non putant esse deum	sii	sindun unchilaubun	dhes sindun unchilaubun iudeoliudi dhazs sunu endi heilac gheist got sii
cognouisse	348	testatur	a.c.i.	mysterium alias se cognouisse testatur idem propheta	bichnadi	chundida	dher selbo forasago ... chundida, dhazs ir dhera dhrinissa chiruni bichnadi
esse	404	arbitratus est	a.c.i.	non ... arbitratus est esse se equalem deo	uuas	uuas (imu) ardeilendi	ni uuas imu ... ardeilendi, dhazs ir gote uuas ebanchiliih
uenisse	431	dicentes	(分詞十) a.c.i.	argumentantur dicentes necdum uenisse christum	quhami	quhedant	sie ... zellando quhedant dhazs noh christ ni quhami
fuisse	468	ostenditur	a.c.i.(主語)	ostenditur ... ciuitatem ... in exterminatione fuisse	aruuostit uuardh	ist araughit	ist ... araughit ..., dhazs dhiu burc ... aruuostit uuardh
cessasse	468	ostenditur	a.c.i.(主語)	ostenditur ... sacrificium unctionemque cessasse	bilunnan uurdun	ist araughit	ist ... araughit ..., dhazs ... ghelstar ioh saibunga bilunnan uurdun
natum fuisse	485	probauimus	a.c.i.	probauimus ... christum ... iam natum fuisse	uuardh chiboran	chioffanodom	chioffanodom uuir ... dhazs christ ... iu uuardh chiboran
esse	548	ostenditur	a.c.i.(主語)	ubi ostenditur dominum esse iesum christum deum ... testabatur in carne esse uenturum	ist	ist araughit	hear ist araughit dhazs iesus ist druhtin chundida ir ..., dhazs ir in sines edhiles
esse uenturum	560	testabatur	a.c.i.	certum est ... non defuisse principes ... nec duces	quhoman scolda uuerdan	chundida	fleische quhoman scolda uuerdan uuuar ist ..., dhazs ni bilibun ano herrun ... noh ano leiidih
defuisse	580	certum est	a.c.i.(主語)	dicunt nondum esse hoc tempus expletum	biilibun	uuuar ist	quhedant leogando dhazs noh ni sii dhazs ziidh arfullit
esse expletum	589	dicunt	a.c.i.	hęc omnia quisquis in salomone putat fuisse inpleta	sii arfullit	quhedant	dhiz susliihhe so huuer so uuant dhazs izs in salomone uuari al arfullit
fuisse inpleta	632	putat	a.c.i.	ignorantes ... unum esse deum patrem et filium et spiritum sanctum	uuari arfullit	uuanit	unbiuuizssende sindun, huueo ... sii ein got fater endi sunu endi heilac gheist
esse	257	ignorantes	a.c.i.	nemo dubitet secundam esse personam	sii	unbiuuizssende sindun	ni bluchisoe eoman, ni dhiz sii chiuuisso dher ander heit
esse	197	dubitet	a.c.i.		sii	bluchisoe	
							↓ (zi+動名詞)
uocari	400	agnoscant	a.c.i.	impii ... agnoscant uocari christum filium dei	zi nemnanne	bichnaan sih	dhea aerlosun ... bichnaan sih zi nemnanne christ gotes sunu
uidere	720	dabis	a.c.i.	nec dabis sanctum tuum uidere corruptionem	zi chisehanne	ghibis	ni ghibis dhinemu heileghin zi chisehanne unuuillun

別表・ラテン語の不定法用例一覧(3)

<i>Lat.</i>	行	支配する語	分類	構成	<i>ahd.</i>	支配する語	構成
					↓(不定詞)		
missum esse	225	testatur	a.c.i. (非人称十)	qui omnipotens deus a patre ... missum se esse testatur?	uuesan chisendidan	sih chundida	ir almahtic got sih chundida uuesan chisendidan fona ... fater
pati	513	oportuit	a.c.i.	illum ... pati oportuit quę omnia quis non uideat nunc in ipsis esse completa?	chimartirof uuerdhan	chirista	ir ... chirista chimartirof uuerdhan
esse completa	601	uideat	a.c.i.		uuesan arfullit ↓(現在分詞)	chisehe	huuer ist dher dhiz al ni chisehe in im selbern nu uuesan arfullit?
tenere	591	mentientes	(分詞十) a.c.i.	mentientes nescio quem regem ... regnum tenere	uualdendan ↓(過去分詞)	(uueizs)	ni uueizs ih einigan chuninc ... oostarriihes uualdendan
parere	70	facio	a.c.i.	qui alios parere facio		katuoe	ih andre gaborane katuoe
uenisse	483	credunt	a.c.i.	eum adhuc uenisse non credunt	quhomenan	uuelient chilauban	ni uuelient sie inan noh quhomenan chilauban
nasci	513	dicit	a.c.i.	quia illum dicit nasci	chiboran	uuardh chisaghet	dhazs ... ir ... uuardh chiboran chisaghet
detegi	595	adtentunt	a.c.i.	nec adtentunt ... cecati ... mendacia detegi	antdecchidero	nemant gaumun	ni nemant gaumun ... blinde dhero iro chilihsamono lugino antdecchidero
genitus esse	97	declaratur	n.c.i.	filius a patre genitus esse declaratur quando ... cuncta creata esse	uuard chiboran	ist armarit	ist ... armarit, dhaz christ ... fona fater uuard chiboran
creata esse	98	noscuntur	n.c.i.		ist uuardan	ist chichundit	dhanne ist nu chichundit, dhaz ... ist al uuardan
uenisse	452	cognoscitur	n.c.i.	christus olim uenisse cognoscitur	ist quhoman	ist archennit	ist ... archennit, dhazs ... christ iu ist langhe quhoman
futurus esse	607	praenuntiatu est	n.c.i.	ex dauid autem stirpe ... futurus esse ... praenuntiatu est	quhoman uuerdhan	chiforabodot uuardh?	fona dauides framchumfti ... quhoman uuerdhan ... so ir chiforabodot uuardh
esse promissus	641	intellegitur	n.c.i.	ex quo intellegitur alius esse promissus	uuard chiheizssan	ist zi firstandanne	fona dhesiu ist zi firstandanne dhazs dhar ander uuard chiheizssan
fuisse completum	708	cernitur	n.c.i.	quod iam obtutu cernitur fuisse completum	arfullit uuardan	chisehet	dhazs iu azs antuuerdin chisehet arfullit uuardan